



特選
2012

全国公民科・社会科
教育研究会会長賞

第10回「金融と経済を考える」高校生小論文コンクール

不便な生活の中に見えてくる本当の快適さ

大分県・大分東明高等学校 2年 赤峰 希美

私達の生活は、曾祖母や祖母が若かった時代に比べると、格段に便利で快適になってきているという。そして、その便利さも快適さも、より高いものが追求され、こちらが要求している以上のものが提供されるといった具合である。

欲しい物は近くのデパートや量販店に足を運べば、買い求めることができる。知りたい情報は、インターネットで検索すればいとも簡単に手に入れることができる。しかし、この一見便利で快適な生活が本当に私達にとって便利で快適であるのだろうか。「便利」の語義は、「都合のよいこと。うまく役立つこと」であるが、私は、便利という言葉に「正確に、かつ確実に思い通りの結果が迅速に得られるもの」と捉えている。そして、それによって、私達は安心感や満足感を十分に得ることができるのである。速ければ速いほど、確実にあればあるほど、より便利で優れていれば、高く評価されるのである。テレビで流れる運送会社のコマーシャルを引き合いに出すと、引っ越しの業務や細やかなサービスの1つ1つが分かりやすく紹介され、更には利用者からの感想や要望を聞き、新たなサービスを開拓する気構えまでもが視聴者に向けてアピールされている。そのほかにも、軽快な音楽やタレントの笑顔と重ねながら、手軽においしく食べられることやカロリーを考えていることをうたい文句にして、生産者の顔が全く見えない食品が毎日のように繰り返し宣伝されている。私達は、店頭で綺麗な包装を施されて、整然と並べられた食品を手に取り、何の疑いも持たずに口にしている。それらがどこで作られ、誰の手を経て、家庭に届けられたかも分からないままにである。私達が享受する便利さには、便利を提供する側の消費者獲得をかけた戦略や会社の末端で汗を流して働く人々の苦勞などほとんど覗くことはできない。消費者側はより便利なものを求めて、提供されたものを当たり前のように受け入れていく。そこには、提供してくれる人々への感謝の気持ちもなく、たとえ感謝の念があったとしても、それを表現することすらできないような





寂しい状況が生まれるだけである。私達が便利さを追求した先には、物事を考える意欲を失ってしまった私達の姿、考えていないことすら分かっていない私達の未来が見える気がするのである。

昨今の若者は、キレやすいと言われる。その要因としては、ファストフードやインスタント食品に代表される食習慣の変化、不規則な生活習慣、テレビやゲームの時間の増加、など様々なことが挙げられている。その一因であるとは断定できないが、便利さを追求した挙げ句、短絡的に自分に都合のよい結果を求めるようになったことが1つの要因となっていると考えられないだろうか。今を生きる私達の生活は非常に便利で快適にはなったが、それが度を越すと、快適とはいえない状況が生まれてくることも十分に考えられる。そんな今の状況の中で、私達はこれからどのような方向に進んで行けばよいのだろうか。

これからも次々と便利さは追求され、どんどん加速されていくと予想される。私はそれを否定せずに、便利さとは全く反対の方向に進むべきであろうと考える。多少なりとも不便さを感じる生活を取り戻すのである。例えば、以前読んだ本の中で、これからの衣食住について示唆する貴重な実践が紹介されていた。「物を捨てない、物がめぐる生活」を実践している人々の生活のアイデアである。古くなって着られなくなったセーターをほどこき、もう一度編み直す。はぎれを取っておいて、ティッシュ代わりにして使用する。雨水をためておいて、トイレの水として使用する。照明の1つとしてソーラーランタンを使う。干したみかんの皮を燃やして、虫よけにする。

調理で出た野菜や果物の種を取っておいて、庭にまいて育てる。食材を購入する時には、ボウルや容器を持参して、包装紙やトレイを極力ゴミとして出さないようにする。このほかにもたくさんの実践が示されていた。こうした不便さのある生活は、分単位で忙しく働く現代の私達には馴染みにくいものであるかもしれないが、1つ1つがアイデアに満ち、生きている実感が持てそうである。どれか1つを取って実践する価値がある。

不便さを自分の力で何とか克服しようとするれば、人は立ち止まって考えなければならなくなる。実際、このような生活は時間がかかり、手間もかかる。そういえば私の家にも不便ではあるが、地に足がついた生活がまだ残っている。曾祖母が祖母に伝え、いずれ母が受け継ぐ生活の仕方の数々である。その1つに6月の





終わり頃に一家総出でする味噌づくりがある。麦を洗って蒸す。蒸し上がった麦を一旦人肌の温度に冷やし、麴をまんべんなく麦にまぶす。その後、麦が冷えすぎないように毛布でくるんで、ゆっくりと発酵させる。

麦に華がついたら、炊いてつぶした大豆と塩を加えて、よく混ぜる。8人家族の1年分の味噌を一度に作るので大量である。うまく混ぜるように、袋に入れて足で踏む。そして、樽につめて、2、3ヶ月ねかせる。時間と手間が非常にかかる作業であるが、その間に家族が汗を流し、お互いに様々な会話をする。

出来上がった味噌は、「おばあちゃんの味噌」と呼んで、店の味噌とは区別をする。しばらく遠く離れて生活していた叔父が帰省して、久しぶりにこの味噌で作った味噌汁を味わうと、
「ああ、家の味だ。大内の味だね。」

となつかしがる。手間暇をかけた自家製の味噌は、人の記憶をもよみがえらせる。毎日のように味噌汁を食べる私でも、時間をかけて作ったこの味噌の味のおかげで腹の底にぐっと力がこもり、体全体に味噌の味が染み渡る感覚を味わうことができるのである。

もう1つ、手間暇のかかる我が家の年中行事に餅つきがある。正月のほかに地域の祭りが近づくと、これも一家総出で大がかりな餅つきが始まる。餅つきの日は前日から水につけておいたもち米をかまどで炊く。さすがに石臼と杵を使っての餅つきではないが、かまどに火をおこして炊くので、朝早くから作業が始まる。時間もかかり、一気に作業を進めなければならないので、家族一人ひとりの役割がしっかり決められ、忙しい思いをする。しかし、もち米の蒸しあがるいい匂い、かまどの中の炭の燃える様子、家族の話し声、もうもうと釜屋中に立ちこめる湯気、熱くてやわらかい餅の感触など、全身で餅つきを体験することができる。たとえ時間や手間がかかろうとも、それには代えられない貴重なものを得ることができるのである。このように、私自身の家庭の生活を取り上げるだけでも、便利とは反対の方向に向かっていながら、便利さの追求で得られた快適さとは全く質の異なる快適さを充分に見出すことができる。おそらく、日本全国の多くの家庭に不便さの中にある快適さがいくつも残されているのに違いない。私達は、便利さを追求するあまりに失ってしまった大切なものを今一度、自分の身のまわりから見つけ出さなければならない。





もしもそれが見つからなければ、誰かの実践に習って追体験してみるとよいだろう。その苦勞の過程で人間らしく生きていることを実感できるであろうし、手間暇かけて作り上げたものをじっくり味わうことを大事にすべきである。自分が作ったものには、愛着が持てるというものである。

これからの私自身の進む道は、便利さから生まれる快適さと不便さの中から生まれる快適さという両極にあるものとバランスをとりながら、関わっていくことであろう。これからの日本が地球規模で発展を遂げなければならない以上、便利さの追求は今後一層加速度を増すに違いない。その中で、祖母や曾祖母、あるいは先祖が大事に守り伝えてきた生活様式が失われてしまわないように、しっかりと受け継いでいきたい。また、人間が人間らしく生きていく上で必要なものが何かを見極める力を少しずつ身につけていきたいとも考えている。このことは、日本が今抱えているエネルギーの問題にも関わってくる。1970年代前半は、私の住む九州には原子力発電所はなく、水力発電や火力発電などで間に合っていたという。今よりも少ない発電量で生活することが可能であったという。その当時の生活に戻すことは、かなり困難なことであると思われるが、電力を節約するような生活は工夫次第で可能になるだろう。不便であっても、そこに快適さが感じられる生活にシフトすれば、今よりも小さい電力での生活が可能かもしれない。そういった試みを今から少しずつでも始めてみたい。

最後に原子力発電という便利さを追求した発電とは反対の方向に進む将来の日本を見据えた新しい発電について紹介をしたい。それは、秩父市で行われている間伐材を使った木質バイオマス発電の実践である。

過疎化が進み、外国の安価な木材に^お圧されて、山林の荒廃が進んできた日本の森林を間伐して元気にすることが1つの目的である。間伐材からチップを作り、チップを燃やして発電する新しい試みである。その発電量は住宅120世帯分という小規模のもので、コストも割高という点で不便さがあるが、管理運営を地域が共同で行うようになっている。次世代エネルギーとして注目すべき発電の方法である。

<参考文献>

- ・「ものを捨てない、楽しい暮らし」『天然生活』地球丸、2011年8月号
- ・「森からエネルギーをつくるということ」『天然生活』地球丸、2012年8月号

